
妖と夜叉 番外編

霜月サヤ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

妖と夜叉 番外編

【Nコード】

N8069Y

【作者名】

霜月サヤ

【あらすじ】

連載『妖と夜叉』の番外編集です。

はじめに

はじめに

こちらは『妖と夜叉』の番外編集となっております。
ヒロインの詳しい設定は、本編の方をご覧ください。

簡単にヒロイン設定を紹介

ヒロイン（奴良リオ）は、リクオの双子の姉です。

また、番外編は思いついた順に書いていくため、時期がバラバラとなります。

1話ごと完結となるため、読むには支障はないと思います。

番外編では、キャラ崩壊が目立ちます。

その辺はご了承ください。

それでは、番外編集は次話よりです。

本編『妖と夜叉』もよろしく願います。

混合ゆえに起こること（前書き）

声優ネタです

混合ゆえに起こること

奴良家にて世話になっている坂田銀時。
そんなある日のこと。

混合ゆえに起こること

なんやかんやで銀時の話し相手は、リクオとリオだった。

「義兄弟？」

「そうなんだよ。今日、義兄弟の鳩^{ぜん}くんが来るんだ」

「鳩の兄貴は、結構アレだもんね」

「ボクが三代目継がないって言っていた頃と比べればマシだよ……」

「そういえば坂田さんの声って、どこことなく兄貴の声に似ているよ
うな……」

「あ…確かに…似ているかも」

「?どんな奴?」

この家のことを聞いていたが、義兄弟であるという“鳩”の話が出た。

「んゝ、病弱な妖怪」

「なのに、熱血なんだよね」

と、その時、周りの者どもが騒ぎだした。

「あ、鳩くん来たみたい」

「坂田さん、会ってみる?」

「ん。暇だしな」

その鳩とやらに会ってみることにした。

「兄貴ゝおひさゝ!」

「おお、リオか。見ねえうちに、またキレイになったな」

「やだあ、冗談よしい」

「リオ、鳩くん。そこまでにしなよ」

「……………」

似ているも何も、同じじゃねえかアアアアアア！

「ん？リクオ、誰だ？」

「坂田銀時さん。昨日から本家で預かってんだよ」

「なーんか、訳ありみたいな感じだよ」

「鳩だ。よろしくな」

「あ、坂田銀時です」

「……………」

俺と同じ反応じゃねえか、コノヤロー。

「あ、考えたら、同じ杉・智・じゃなかった？」

「あゝ確か、そうだったような……」

「同じ・田・和じゃ、仕方ないよね」

「ちょッ！リオー！伏せ字の位置が違うから！伏せ字の意味をなさなくなるから！！」

混合ゆえに起きること。

それは、同じ声を持つ者が会合う可能性があるってことだ。

「と、とりあえず、よろしくな」

首のないイケメンさん（前書き）

タイトル通りのキャラが出ます

首のないイケメンさん

奴良家でお世話になることは必然的に、本家の妖怪と出会うというもの。

とりあえず、挨拶をすることに。

首のないイケメンさん

「とりあえず首無から会おうか」

リオがそう言った。

「首無？」

「うん、まあ見た目も名前通りなんだけど、すっごくイケメンだよ」

「イケメンって何だ？」

「あー、イケてるメンツの略なんだけど…要するに顔が整ってるってこと」

「ふーん」

「あ、でも坂田さん平気かな？」

「だ、大丈夫だって」

「じゃあ行こうか」

リオは立ち上がり、首無のところに行く。それに銀時は続いて歩いた。

「やつほー首無」

「リオ様？どうなさいました？」

「うん、ちょっとね」

「ああ、そちらの方のことですか？」

「まあ、そうなんだけどさ。坂田さん、この人が首無。んで、この人が…」

「坂田銀時だ」

「坂田殿ですか。私は首無です」

「リオから聞いたけど、マジで首ねえの？」

「ええ。なので、こうしてマフラーをし、首がないことを隠してます」

「ちなみに名古屋まで首が飛ぶ」

「ははは」

「名古屋ってどこ？」

「えーと…ねえ首無」

銀時がこの時代の人間でないことを思い出したリオは、首無に聞いた。

「はい？」

「江戸時代だと名古屋は何？」

「江戸時代ですか…確か、尾張ですね」

「尾張か。それじゃあ、相当だな」

「大変でしたよ」

「まあそういうことで、首無よろしくね」

「わかりました」

区切りがよかったので、首無と別れた。

「坂田さん、首無は怒らせない方がいいからね」

「何でだ？」

「言っじゃないですか。普段穏やかな人程、怒ると恐いって」

「あーそうだな」

「リオ様、聞こえていますよ」

「う…げ…（地獄耳…）」

「別れて間もないのに、言うからですよ。それでは聞こえて当たり前です」

「すみませんでしたー！！」

「（なんか、首無って奴には、あんまし接触しねエことだな…）」

首無とリオのやり取りを見ると、確かに“穏やかな人程怒ると恐い”というのは正しいと思えた銀時であった。

氷には気を付けよう（前書き）

タイトルでお分かりの方です

氷には気を付けよう

「奴良家でのご飯、カチカチになったご飯なんだよね」

「はあ？」

リオの言葉に疑問を感じる銀時であった。

氷には気を付けよう

「どういうことだよ」

「あ、そういえばまだ氷麗ちゃんには会っていないよね」

「氷麗？誰だ？」

「雪女の妖怪だよ。氷麗ちゃんが、ご飯を作ったり、運んだりしているから、ご飯が氷付けになるんだよ」

「それで、さっきの言葉になるわけなんだな」

「そういつこと」

氷麗ちゃんに会おうかって言葉を続けた。

「いちいち会わねえといけねえの？」

「そんなことないよ。会いに行こうって言っているのは、みんなリクオと盃を交わしたメンバーだけだよ」

「ふーん。で、その雪女もか」

「うん。あ、氷麗ちゃん」

前方の方には、洗濯物を運んで干している氷麗の姿があった。

「リオ様！どうなさいました？というより、そちらの方は？」

「えっとね…「坂田銀時だ」…です」

「……………ま、ま、まさか！？り、り、リオ様の…」

「違うから！！」

氷麗が言おうとした言葉を遮り、否定するリオ。

「そうですか」

「そうなの。しばらく厄介になる坂田さんだよ」

「ご挨拶遅れました。私は雪女の氷麗です」

「改めて、俺は坂田銀時だ」

「それじゃ、氷麗ちゃんに会ったし、次行こう！」

リオは銀時を引っ張り、次の人を会いに行った。

その後は、口うるさいカラス天狗を始め、遠野の淡島曰くエロ田坊の黒田坊、力なら負けない青田坊、マイペースな河童、巨乳の毛娼^{けじよう}妓^ろ、その他もろもろ会いに行ったのだった。

夜空の下で（前書き）

サイトが二周年の際にリクエストされた作品

夜空の下で

「銀時〜！銀時〜！」

「リオ？どうした」

「散歩しょ？」

彼女はそう言った。

夜空の下で

「夜なのにか？」

「夜だからだよ。というか、付き合って」

「何に？」

「巡回に」

熱心なこった、と銀時は思った。

「それはついでなんだけどね」

「ついでなのかよ」

「ついでついで」

そんなことを言った彼女は、やはり多少沖田君の影響を受けている、と銀時は思えた。

「わかあったよ」

「エヘヘ…久しぶりの二人っきりだよ」

「そうだな…」

そんなことに気が付き、久しぶりのドキドキ感になる。

「銀時ありがとう」

「どうした？急に」

「うん、何でもないよ」

しばらく静寂となった。

「…リオ」

「ん？」

急に名前を呼んだ銀時に、振り向くりオ。

「お前に会えて良かったよ」

「私もだよ、銀時」

そんな会話をされていることを知っているのは、夜空に輝く星らのみであった。

非番Ⅱ 悪運（前書き）

リクエスト作品

時期

本編、第四十八訓後と第四十九訓前

非番Ⅱ悪運

私の非番の日は、厄日なのか？って切実に問いたい。

非番Ⅱ悪運

非番の日。いつも通りに、万事屋でのんびり過ごしていた。

ドコオオオオン！と万事屋が壊れるまでは。

「アッハッハッハッハッ、金時〜。遊びに来たぜよ」

「銀時だアアアアア！！そして、家壊すなアアアアア！！」

「グフッ」

相手に飛び蹴りをかました銀時。

「誰？」

「あ、奴良さんは初めてですね。銀さんの知り合いの坂本辰馬さ

んですよ」

「ふうん、そうなんだ。…銀時、その辺にしたら？」

未だに、言い合い（と言っても、銀時が一方的に蹴ったり殴ったりしているだけ）している二人に声をかけた。

「リオ…」

「えと、はじめまして坂本辰馬さん。真選組一番隊副隊長、奴良リオです」

「アッハッハッハッハッ、よろしくじゃき」

「コイツは、頭カラな奴だから」

「アッハッハッハッハッ。金時、ヒドイじゃき」

「銀な、銀」

「なんか…変わった人だね」

リオは思わず言う。

「お嬢ちゃんもヒドイぜよ」

「坂本さん、陸奥さんは？」

今まで空気化となっていた新八が聞いた。

「…いや、空気化したのは、作者^{アンタ}だろ」

ジャキと坂本の後ろに銃が備えられた。

「あ」

「陸奥さん」

「頭が邪魔したぜよ」

その一言を言つて、坂本を引きずりながら帰った。

「玄関…壊されたままだね…」

「そうだね…」

「なんか疲れたから帰るよ…」

「頭カラの奴を相手にしていたからなア」

「奴良さん、気をつけて」

「ありがとう、新八くん。じゃあね」

リオは万事屋を後にした。

万事屋からの帰り道。

別の意味で見慣れた衣服に気がついた。

「…あ」

今日は非番だ。最も、非番じゃなくても仕事はしたくないが。（沖田影響）

「（相手が、相手だし…）」

その人物を追うように歩む。

その人物は、人通りが少ない路地裏へ入った。

「（気づかれている…？）」

そう疑問になったが、リオも路地裏へと入った。

それと同時に、背後から気配がした。

「てめエ、あん時の犬だなア」

「やっぱりアナタね、高杉晋助」

「肝が据えている女は嫌いじゃねエ」

「それはどうも」

平然と言うリオだが、後ろから刃が備えられているのだ。

「てめエ、何者だ？」

「真選組に所属している奴良リオよ」

「はぐらかすんじゃないエ」

「はぐらかしてなんかいないわ」

高杉が聞きたいことをかわすように言っリオ。

「……………」

「妖怪、ぬらりひょん」

「妖怪イ？」

「そう。もう一人の私」

「あん時、てめエが消えたのはア……」

「妖怪の力」

正直、敵である高杉に与えて良い情報かって問われれば、答えはN
Oのことを喋っているリオ。
だがリオにとっては、高杉の無言の圧力によって、喋っているよう
なものだった。

「ククク……ますます欲しくなったねエ」

「……………アンタの仲間なんてならない」

「そりゃア、そうだろうなア」

「……………」

「またなア」

「あ…」

容易く、高杉に逃げられた。

「向こうが有利だったから仕方ないよね…」

リオはこの出来事を、真選組のメンツには秘密にした。

たまには良いかも知れない(前書き)

リクエスト作品

時期は、本編ED後

『妖と夜叉』では、攘夷メンツは、実は仲良しという設定です。

たまには良いかも知れない

——あなたが幸せに笑うのなら、私は気にしない——

たまには良いかも知れない

「銀時ィ、来ちゃった」

「来ちゃった、じゃねエよ。堂々サボリですかコノヤロー」

「うん」

リオは即答で頷いた。

「あのさア、リオ」

「ん？」

「君さア、沖田君に似てきてない？」

「サボり癖？」

「おう」

「大丈夫だよ、沖田隊長公認だから」

いや大丈夫じゃねーだろ、と銀時は思った。

とそこで玄関のチャイムが鳴った。それと同時に、聞こえてきた声には聞き覚えがあった。

「……………」

只今、奴良リオはサボり中だが、本来勤務中である。
ニヤリとした表情を浮かべた。

「ふふふふ」

「（ツラ…御愁傷様）」

無言で玄関の戸を開ける銀時。

玄関に立っていたのは、指名手配犯である桂小太郎であった。

「銀時、今日はやけに早く開けて…」か…つ…らアアアア…！
…！…！」

ドオオオオンとバズーカが放たれた音がした。

「…やっぱりリオ…沖田君の影響受けすぎじゃねエか…」

ボソッと呟く銀時だった。

その直後、リオが放ったバズーカの音よりも更にデカイ音が玄関先でする。

「「!!」」

「アッハッハッハッ、またやってしもうたじゃき」

「坂本さん!？」

「おおゝ金時、リオ!久しぶりじゃのう!!」

「銀時だアアアア!!ボケエエエ!!」

言いながら銀時は、坂本へ飛び蹴りをした。

「次から次と……アンタは!!」

「よオ、久しぶりだなア」

「高杉!?!てめー何でここに!?!」

「わしが連れて来たぜよ」

「「「はあ!?!」」」

リオと銀時、知らぬ間に復活していた桂は、揃えて聞き返す声を出した。

「坂本さんって……本当に頭カラなんですわね……普通、敵同士を鉢

合わせますか……」

「アッハッハッハッ。……泣いていい？」

「高杉…次会ったら斬るっつーたが…」

「一時休戦だ」

「いいのかア」

「万事^{じふ}屋を血染まりしたくねエ」

「だそうよオ、幕府の犬さん」

「……別にいいわ」

不本意ながらもリオは頷いた。

「すまねえな、リオ」

「本当にだよ、銀時。もう、完全に仕事オフモードにする」

「そうか…」

リオは、仕事中和そうでない時の態度が、かなり違う。公私をしっかりと分けているのだ。

「辰馬ア、何の用？」

「皆で酒を飲むぜよ」

「それだけの為に？」

酒を皆で飲む。

その為だけに、敵同士を引き合わせたのだからしょうもない。

その後、ギャーギャーと騒ぐ皆。

「（たまには、こういうのも悪くないね…）」

リオは、どこか楽しげな彼らの姿を見て、そう思った。

「リオも傍に来いよ！」

「うん！」

そしてまた、リオもどこか楽しげな表情を浮かべていた。

戦の記憶（前書き）

リクエスト作品

本編ED後設定

戦の記憶

目を覚ませば見知らぬ土地にいた。

「ここは…」

周りに散られているのは死体だらけに、何よりもキツイ死臭で吐きそうだった。

「う…」

今まで斬ってきたことはあったが、ほとんどは悪妖怪である。

「もしかして……ここは過去？」

人と天人の死体が転がる場合は、可能性として攘夷戦争時代であろうと予想できた。

「どうして過去に…」

とにかく進まなきゃっ！

そんな気持ちを抱きながら、この場から離れた。

戦の記憶

と言ったものの、右も左もわからない所謂“迷子”なのだ。

「あ……」

思えば空は鉛色、曇天の空であつた。

「どうしよ……」

見知らぬ土地、そのためか気を緩んでいた。
背後に天人がいたことを気づけなかった。

「……」

常に畏れを解くな、それは妖怪世界では当たり前だった。
微量ながらの畏れで鏡花水月を出せたが、やはり無傷とはいかなかった。

「……ッ……！」

「イヒヒ……女だア……」

「……女だからって舐めんじゃねエエエエエ！！」

リオは、その天人を斬り捨てた。
それでも、なぜかワサワサと集まってくる天人。

「オイオイ…面倒なことになっちゃったよ…」

仕方なしにという雰囲気を出し、リオは妖怪姿となった。
無論、姿が変化したことに天人は驚いた。

「久しぶりに本気、出すとしますか」

それからリオは、天人を悪妖怪と考え斬っていく。
だが、やはり肉や骨を斬る感覚というものに、嫌気になる。

「どんだけいるんだよ、コノヤロー…」

リオは思いのほか、戦場の中に入り込んでしまっていたのだろう。
ふと、辺りを見回すと見慣れた色。そして“白夜叉”という言葉。

「（銀時…だよね…）」

もしかしたら、この場は彼の持ち場だったのだろう。
だから、こうして会うことができた。
たとえ、“私”を知らない彼であっても。

「大丈夫か？」

「あ、ありがとう…ごじます…」

彼が残り全ての天人を殺つたのだろう。
辺りには、私と彼しかいなかった。

「お前、なんでこんなところにいる？」

「それは…わからないです」

「わからない？んな事、あるかよ」

「わかんないのはわかんないよ！！ぎ…」

彼の名前を言いそうになり俯いた。

そうだ、彼は過去の彼だ。それも私達、奴良組に会う前の。

「……たく、しょうがねエな。ついて来いよ」

「え…？」

「訳あり、だろ？」

「う、ごめんなさい…」

リオを慰めるように頭を撫でる銀時。

その仕草に、リオは安心感と懐かしさで泣きそうになった。

着いた場所は、廃墟となったものであろう建物であった。
おそらく、そこが拠点であるのだろうとリオは思った。

「銀時、遅かったな」

「ッラ」

「ッラじゃない桂だ。その女子おなこは？」

「んー、拾った」

「アッハッハッハッ、おんしらあ女子の名を聞かんか」

「あーそうだな」

「お主の名は？」

「奴良リオです」

私にとっては自己紹介はいらないけれど、この時代の銀時らには必要なんだよね。

そして、各々が自己紹介していった。

「んで、リオ。お前、何であんなところにいたんだ？」

「それはわかりません。……けど、ここにいられるのは数日だけだと思う……」

「……………」

「しばらくの間、よろしくお願いします」

「おう」

しばらくの間、お世話になることになった。

お世話になって数日、好き勝手に過ごさせてもらっていた。

「いつ、帰れるのかな…」

お決まりのように夜の散歩をしていたリオは、未だに元の時代に帰れる気配がないことに不安を感じていた。

「オイ」

「あ、高杉…さん…」

夜の散歩は、妖怪姿であった。

なので、今まで誰にもバレないように散歩へ行っていた。

「おめエ、何者だア？」

「それは…」

バレたなら、いつそのこと真実を話すべきだろうとリオは思った。そしてリオは、未来から来たこと等を伝えた。

「信じらねエ話だなア」

「そうですよね…」

「だが、信じてやる」

「え…」

「おめエが未来から来た奴だってことをだ」

「…本当に、ですか？」

「ああ」

素直に信じてくれたことが嬉しかった。

そしてリオは過去の高杉のことを、現代の高杉とは違いすぎると思えた。（最も、あまり接触した回数が少ないため、知らないことが多すぎるゆえにだろう）

リオは日中では、敷地内をウロウロとしていた。

そしてある日、リオは聞いてしまった。

「1週間か…この時代に来て」

そろそろ本当に恋しくなったのだ、リオは。

そんなことを考えていたリオの耳に届いたのは、ある者に怖気づく話し声。

「……………」

リオは、それを聞く度に悲しく悔しい気持ちになった。

そして、その者のところにリオは行くのだった。

リオは、その者に辿り着いた瞬間、後ろから抱きついた。
当然、その者は驚いた。

「リオ？」

「……………」

「……俺さア、時々思うんだよ…本当に人間なのかって…本当は化け物じゃな「化け物なんかじゃないよ！」…！」

「化け物なんかじゃない…人間だよ、銀時」

ギュツと抱きしめる力を強めた。

「リオ…」

「“白夜叉”やら“化け物”やら言われても、銀時はちゃんと人間だよ！私は銀時に怖気づいたりしないから」

「…リオ…あんがと」

「それに…（私の方が“化け物”だよ…4分の1とはいえ“妖怪”なんだから）」

「“それに”なんだ？」

「何でもないよ……今までありがとうね」

「え？」

「私ね、未来から来たんだよ。そして今、元の時代に帰るみたい」

「……そう」

「あ、ちなみに一つ暴露するけど、私と銀時は夫婦めおとの関係だから」

「はああああ！？ちよつ、それどついう…」

いきなりの暴露に、銀時は思わず後ろを振り向いたが、すでにリオの姿はなかった。

「……ん……」

「……リオ……！」

「……ここは……？」

目を覚ませば見知らぬ天井。

そして、今にも泣きそうな、そんな感じの心配顔をした彼。

「よかった……！リオ、1週間も目を覚まさなかったから……」

「……1週間も……？それに……なんで……」

「沖田君の話じゃ、リオは真選組の仕事中に他の隊士を庇って大怪我をしたらしい」

「それで1週間も……」

「マジでよかった……このまま、目エ覚まさなかったらって思った

から……」

「銀時、ごめんね……」

「謝んなよ。俺ア、リオが生きててくれて嬉しいからよオ」

「ありがとう……」

1週間、目を覚まさなかったという話の間に経験した、過去の時代。それで得られたものはなかったが、リオは未来永劫、愛しき彼の傍にしようと思った。

月夜のどんちゃん騒ぎ（前書き）

リクエスト作品

リクエストをもらった当時の時期的ネタです

時期

本編ED後

月夜のどんちゃん騒ぎ

賑やかであることが一番いい。

月夜のどんちゃん騒ぎ

「今日、お月見しよう、皆で」

「そういえば、今日でしたね。お月見の時期」

「お月見って何アル？」

「お月様を見ながら楽しむんだよ」

今、万事屋には銀時以外がいた。（銀時はパチンコ）

「そうだと決まったら、場所だよな」

「そうアルナ」

うーん、と唸る三人。その横に、定春はクウーンと鳴く。

「とりあえず私は飲み物を、新八くんは食べ物、神楽ちゃんは銀時をよろしくね」

「はい」

「はいアル！」

リオの指示に、それぞれが行動をし始めた。

リオは飲み物（といってもお酒と新八と神楽用のジュース）を持って、万事屋に戻った。

その万事屋には、銀時・新八・神楽・定春がいるのはわかるが、その他にもいた。

「神楽ちゃん、新八くん。これ、どういう状況？」

「私達が帰ってきた時には、もうコイツ等いたアル」

「そうなんだ。……まあ、いいや」

「いいんかいイー!？」

「だって今日は楽しまないと、ね」

「そうアル」

「そうですけど……」

ちなみに、この会話はコソコソと行われていた。

「リオ、遅かったな」

「ごめんね。コレ、持ってきたから」

コレ、つまりお酒を見せる。

「気が利くなア」

「ちょうど、坂本が持ってきた酒がなくなっただしな」

「アッハッハッハッハッ、次の酒じゃ」

「程々にね。特に銀時」

「なんでだよ」

「酒癖、悪いんだってね。聞いたよ」

「…ぐッ…言い返す言葉もない」

リオは自分が持ってきた酒を飲む。

そこに、新八が食べ物を持ってきた。

「リオさんの言う通りです、銀さん」

「そうアルヨ、銀ちゃん」

「クウーン」

子供らと定春にまで、リオの「酒を飲むのは程々に。特に銀時」発言に同意する。

「お前らまで…」

「言われ放題じゃねエか、銀時イ」

「るせエ、チビ助」

「んだと、クソ天パ」

「また貴様らは…」

「「るせエよ、ヅラ！」」

「ヅラじゃない桂だアア！！」

「アッハッハッハッハッ、ヅラが一番うるさいじゃき」

「「「だまれ、毛玉」」」

「「……………泣いていい？」」

そんな彼らのやり取りに苦笑する新八と神楽。
そして、そんな彼らを止めるのはリオ。

「てめエら、黙って月見を楽しめや」

「……はい、スミマセン」……

普段の口調ではなく、背後に黒いオーラが見えた。

「流石、リアル！」

「ワン」

「神楽ちゃん…定春…」

それから、いつも通りの騒ぎをしながら、リオをキレさせない程度に騒いだ。

お月見といっても、それはただの口実だっただろう。

「多い方が賑やかですよね」

「銀ちゃん達も楽しそうアル」

「ワン！」

「定春もそう思うみたいね」

しんみりした月見より、ギヤアギヤア騒ぐ今のような月見が、僕らにお似合いだ、と新八は思った。

それは、ここにいる皆がそう思っていることだろう、と思いながら、新八は次の食べ物を用意に向った。

「…また、皆で騒ぎたいね…」

「そうだな…」

リ才の言葉を拾った銀時であった。

月と酒と（前書き）

リクエスト作品

リクエストをもらった当時の時期的ネタです

時期

本編ED後

月と酒と

闇夜を照らす月――

それが最も美しく見えるとされる日――

月と酒と

中秋の名月。

そんな日にリオは、屯所の縁側に座っていた。

「今日はお月見の日か…」

奴良家であつたなら、普段リオはリクオと夜桜の下で酒を飲んで
いた。

だが、ここは奴良家ではなく、真選組の屯所である。

やはり中秋の名月の日であるためか、屯所内は賑やかであつた。

「…女だつてこと忘れてるよね」

リオが縁側に出ている理由は一つであつた。

局長である近藤が、全裸——映像ならば局部にモザイクがかかる——になっているからである。

男の裸に慣れてないリオは、酒を少し持って退室したのだ。

「…一人酒もいいけど、誰かと飲みたいな…」

そう呟いて浮かんだのは、銀色の彼であった。

「……よし、銀時のところに行こう」

リオは万事屋へ向かった。

「ぎーんーとーきー！」

「リオ？」

「来ちゃった」

「来ちゃったって…抜け出しているのか」

「だって…酒のせいで、私が女だってことを忘れてるんだよ。…」

……あのゴリラ、全裸になりやがって」

「リオも十分、酒に酔っている」

銀時はリオのおでこに、軽くデコピンをした。

デコピンされたリオは、おでこを押さえて「痛ッ」と言う。

「酔っていない、酔っていない。つい、本音がポロリと」

「んで、理由は？」

「一緒にお月見しょ？」

「そっか、今日は月見の日か」

「忘れていたの？」

「あア」

「お酒は、屯所から盗ん…持ってきたから」

「リオ、今、盗んできたって言いそうになったよね」

「気にしない、気にしない。ほら、飲もう？」

どこから取り出したのか、リオの手には盃があった。
すでに、お酒は注がれてある。

「リオ、俺に酌やれよ」

「うん」

銀時は、リオに酌された酒を酌む。
そして静かに、月見をする二人。

「……銀時」

「ん」

「私、銀時に会えて良かったって、今も思っているよ」

「俺も、だ…」

「好きになった人が銀時だったことも、ね」

「俺もだよ、リオ」

ほろ酔い状態なためか、饒舌になっている二人。

普段、恥ずかしくて言えない本音を、酒という力で話していた。

「リオ…」

「ん？」

クチュと音を立てて、重なり合う互いの唇。

「…………ん…………」

息が苦しくなってきたところに、名残惜しそうに、互いの唇は離れた。

「愛してる」

「…私も」

彼らを見ているのは、闇夜を照らす月だけ…

身内は久しき再会でも久しぶりに感じない（前書き）

リクエスト作品

時期 本編ED後

身内は久しぶり再会でも久しぶりに感じない

「姉貴!？」

「ひ、久しぶり…リクオ」

すでに戻ることのないと思っていた奴良家に今、私は銀時達といま
す。

身内は久しぶり再会でも久しぶりに感じない

事の発端は、リオが巡回（という名のサボリ）の時に不思議な人か
ら貰った物だ。

リオは、それが何なのか分からないため、銀時に相談しようと万事
屋へ向かった。

「ぎーんーとーきー！いるー？」

チャイムを鳴らしながら、声をかけたリオ。

「リオ、仕事中じゃねエの？」

玄関の戸を開けた銀時が、リオの服を見て言った。

「そうなんだけど、ちょっと相談したいことが…」

と言いながら万事屋の中に入るリオ。

「あ、リオ！ちよっ…今…」

リオに、慌てて声をかける銀時。

リオは中に入って、目にした光景に驚き、思わず手に持っている物を落としそうになった。

「久しぶりだなア、リオ」

「久しぶりだな、リオ殿」

「アッハッハッハッ、久しぶりじゃき」

桂小太郎、高杉晋助、坂本辰馬がいたのだ。

「リオ、相談したいことって何？」

「え？あ、ああ、コレなんだけど…」

手にしていた物を、目の高さに掲げた瞬間、辺りが眩しく光った。

そして、冒頭になるのだ。

眩しく光ったのが消えたと思ったら、目の前には妖怪の姿をしたりクオがいた。

「姉貴!？」

「ひ、久しぶり…リクオ」

「来たのは、リオだけじゃねえんだな」

「よオ、久しぶり」

「久しぶり、銀さん」

「誰だア？」

「アンタこそ、誰だよ」

リクオのその言葉をきっかけに、各々自己紹介をする。

「三代目」

「ああ……ちょっと待ってろ」

「リクオ、どうしたの？」

「ん、ちょっとな。出入りなんだよ」

「出入り？」

「奴良組を敵とする奴等が妙な連中を連れ込んできてな。その退治」

「妙な連中？」

「俺達妖怪みてえじゃないし、ましてや人間でもねえ奴」

「それって…」

人でも妖怪でもない者。

リクオ以外の全員、心当たりがあった。

「天人だな」

「でも、どうして天人がこっちに…」

「まあ、ソイツ等を連れ込んだ奴等の本拠地が分かって、今日そこを叩くんだよ。……リオ、手伝ってくれるか？」

「そっか、妖刀じゃ意味ないもんね。もちろん、いいよ」

「俺達も行くぜ」

「銀さん、いいのか？」

「おう」

「アンタ等は、いいのか？」

「フン」

「黙って見逃す訳にはいかぬ」

「ワシはサポートに回るじゃき」

「よし、出入りだアアア!!」

「なんで銀時が仕切るの？」

こうして彼らは、敵の本拠地へ向かった。

敵の本拠地に着き、リクオが動き出すと同時に乱戦となった。

「「明鏡止水“桜”」」

リクオとリオの技で、一気に敵の数を減らした。

「リクオは敵の大将狙いな！」

「ああ！リオ、後はよろしく!!」

リクオは敵の大将であろう者へ走った。

「銀時、天人の方をよろしく」

「リオは妖怪の方をってことか」

「うん」

「……怪我、するなよ」

「銀時もね」

それぞれが動き出した。

敵の妖怪も天人も、強いというわけではなかった。所謂、烏合の衆であつた。

それゆえ、奴良組は圧倒的に勝っていた。

「リクオ、終わった？」

「終わったぜ」

「んじゃ、後はコイツらだけね」

と言っているも、敵は奴良組の皆や銀時らのおかげで、もうほとんどいない。

残りの敵を片付けた。

「帰ってきたか」

「じじい」

「ちょうど、リオらもおるようじゃな」

ぬらりひよんの容姿に驚く、桂と高杉と坂本。
理由はやはり、長い頭である。

「？何、おじいちゃん」

「お前さん達の帰り方がわかってな」

「本当か！？」

「じいさん、マジで！？」

「おお、マジじゃ。ほれ、もうじき帰るじゃろ」

「」「」「！」「」「」

ぬらりひよんの言う通り、リオらの体が消えかかっていた。

「おそらくじゃが、最近奴良組を敵とする奴等が原因じゃろう」

「あ！つまり、敵とする奴等が天人を連れ込んだから、それに対抗するために、私達が連れ込まれたってことだね」

「そういうことじゃ」

「俺ア、早く歸りてエ」

「アッハッハッハッ、帰ったら酒じゃき」

「世話になっ たな」

高杉、坂本、桂の順に、元の世界へ帰った。

「おじいちゃん」

「リオ、元気にやっておるようじゃな」

「うん。おじいちゃんも元気にね！リクオもだよ！」

リオが帰った。

「あとは俺か」

「ワシは早くリオの子供が見たいのう」

「オイオイ、無茶言つなよ」

「俺も見えてえな」

「はあああ！？」

「今度は子連れでじゃ」

「できたらな」

銀時が帰り、残ったのはぬらりひょんとリクオのみ。

「楽しそうにやっているようで、安心したわい」

「じじい……ああ、そうだな」

「重イ…」

高杉を下に、帰っていった順に積み上がった。
慌てて皆、その上を退けた。

「帰ってきたんだね」

「そうだな」

「酒じゃ酒じゃ！金時飲むぜよ」

「銀だ銀、ボケエエエ！」

「アッハッハッハッ、そうじゃったか」

「俺ア、帰る」

「俺もだ。エリザベスが待っている」

「私も仕事に戻るう」

高杉、桂、リオはそれぞれの場所へ戻った。

「やはりここにいたか、頭」

「アッハッハッハッ、見つかったじゃき」

「頭、帰るじゃき」

坂本を引きつりながら、帰る陸奥。

「銀ちゃん、帰ったアル」

「銀さん、あの人は帰りましたか？」

「帰った帰った」

その後、子供らに先ほどまでの出来事を言う銀時であった。

リ才誕（前書き）

本編E D 後

誕生日ネ夕

リオ誕

9月23日。

その日は、リオの誕生日であつた。

リオ誕

「んゝ、暇だ」

背伸びをし、欠伸をしたのはリオ。

本日誕生日で、なんやかんやで、近藤に休日を買ったのだが……

「いきなり休み貰つても……」

万事屋のところには行けない。

理由としては、珍しく仕事が入つたらしいから。

「散歩するか」

団子でも食いに行こう、そうリオは思っ、て、出かけた。

リオは、他の真選組メンバーより印象が良かったので、至るところに誕生日祝いを貰っていた。その事に、リオは疑問を感じた。

「なんで町の人、皆が私の誕生日を知っているの？」

疑問に感じたが、すぐにその疑問を気にしないことにした。

何軒か巡っていると、前方に仕事帰りであろう万事屋メンバーがいた。

「あ、リオネ！」

「よオ、リオ」

「皆、仕事帰り？」

「はい」

「良かったら食べる？団子」

置いてある団子を差し出す。

「マジで良いのか！？」

「リオ、ありがとうネー！！」

リオが団子を差し出した瞬間に、銀時と神楽は団子に手を伸ばしていた。

「いいよ」

「なんか、すみません」

新八が申し訳なさそうに言った。

「あ、リオ」

団子に夢中になっていた銀時が声を上げる。

「何？」

「誕生日おめでとうさん」

ごそごそと懷に手を入れ、何かを取り出した銀時。その取り出した物をリオに渡した。

「ありがとう、銀時！」

「おう……」

嬉しそうに笑うリオに、照れる銀時。

「また二人の世界に入ったネ」

「そうだね、神楽ちゃん」

そう呟く子供二人も、言葉と裏腹に笑顔だった。

愛しき人へ（前書き）

誕生日ネタ

実際、当日祝いにしました

愛しき人へ

10月10日。

リオは、新八と慌ただしく準備していた。

愛しき人へ

リオが今日、銀時の誕生日であることを知ったのは、一昨日だった。たまたま非番の日に、たまたま桂に出会い、桂から聞いたのだ。

「神楽ちゃん、ちゃんと引き止めているのかな…？」

「大丈夫ですよ、きっと」

「そうだね。早く準備しよか、新八くん」

リオと新八だけなのは、銀時を万事屋から追い出し、早く帰ってこないように神楽が引き止める役になっているからだ。もちろん、万事屋のマスコットである定春も神楽と一緒にいったためない。

「これをこーして……あれをあーして……」

料理本を片手に見ながら、懸命にケーキ作りをするリオ。そして、サポートに回る新八。

そうしていくうちに、手作りケーキは完成していった。

「完成したね、新八くん！」

「銀さんも喜んでくれますよ、きつと！」

「そうだと良いけど」

すでに部屋の装飾は終わっており、あとは銀時と神楽の帰りを待つのみ。

「ただいまアル！」

「アン！」

「銀ちゃんは、ちょっと待つヨロシ」

「はあ！？何でだよ」

「いいから待ってるヨ、天パ」

「天パなめんなよ、ゴラアアア！」

その言葉を聞きながら、神楽は先に万事屋の中へ入った。

「リオ！準備できたアルカ？」

「うん！バッチリだよ、神楽ちゃん」

「じゃあ、ダメガネ、銀ちゃんを呼んでくるネ」

「僕ウウウ！？ここ、流れるに神楽ちゃんじゃない！？」

「しんぱち雑用、さっさと行くヨロシ」

「今、“雑用”って書いて“しんぱち”って読まなかった！？」

と叫んだ新八だが、神楽の言われ通りに銀時を迎えにいった。

「銀さん」

「んだよ」

「準備できたから来てください」

「準備だア？準備って一体、何の…」

歩きながら銀時と新八は会話をしていたが、居間への扉を開けた瞬間、会話は途切れた。

「誕生日おめでとう、銀時」

「銀ちゃん、おめでとうネ！」

「誕生日おめでとうございます、銀さん」

クラッカーが鳴らされたと共に、言われた言葉。

「お前ら…」

その時、今日が自分の誕生日であることに、銀時は気がついた。

「…ありがとう」

照れ臭そうに言った。

「それじゃ、パーティー始めようか」

その言葉と共に、銀時の誕生日祝いパーティーが始まった。

そして、万事屋に贈られてきた物らの中に、意外な差出人を見て、驚愕するのはあと少し。

見た目で畏怖されない者もいる（前書き）

万事屋のお隣と言えば？な方登場

見た目で畏怖されない者もいる

「隣へ回覧板を回してくれ？」

それが万事屋にての私の一言だった。

見た目で畏怖されない者もいる

「ちょっと、ちょっと、銀さん！？何、奴良さんに頼んでいるんですか！？」

「そうネ！銀ちゃん、情けないアル」

「んだとオ！？別に、リオだけって訳じゃねえから！！俺らと一緒に行くってことだから！！」

子供らに冷たい視線を向けられ、慌てたように言う銀時。

「よーするに、隣の人が銀時らにとって怖い人で、怖いから行って欲しいってことでしょ？」

「確かにその通りですけど……」

リオのあまりにも直結な言い分に、言葉を濁す新八。

「いいよ、別に。回覧板を回すだけでしょ」

回覧板を片手に持って、リオは万事屋から出た。

「……ぎ、銀さん……奴良さん、行っちゃいましたよ……」

「……………」

「……銀ちゃん……どうするアルカ？」

「……お、追うぞ」

リオの後を追う銀時らだった。

万事屋の隣は、花屋であった。

「こんにちは、回覧板を回しに来ました」

あの銀時らが恐怖を抱いてしまう隣の人って一体誰なんだろう？と
リオは思いながら、声をかけた。

「おや、あなたは？」

店の中から出てきたのは、見た目から天人だとわかる者だった。

「あ、初めまして。私、奴良リオといいます」

「初めまして、僕はヘドロです」

それから何回か会話を始める。
それを見ている者達がいた。

「ぎ、銀さん…奴良さん、全然怖がっていないんですけど…」

「…ああ…」

「……尊敬するネ」

リオの後を追いかけた銀時らだった。

リオと会話を交えたヘドロは、リオに質問した。

「奴良さんは僕を怖がらないんですね」

「あ、うん。慣れているし」

「僕みたいな顔を、ですか？」

「うん、ヘドロさんの顔に似た奴がいたからね（……京妖怪に）」

「そうですか。僕を恐れずに接してくれるのは、奴良さんと坂田さん達だけですよ」

「そうですか…」

ヘドロの言葉に、そう返すしかなかったリオ。

「では、また」

リオがヘドロの店から去れば、尾行してきた銀時達と目が合った。

「リオ凄いネ！尊敬するアル！」

「そんなことないよ。妖怪は相手に畏れを抱いたら負けだからね」

「そ、そう……」

ヘドロの容姿に恐れないリオが、実は最も恐ろしいんじゃないかって思う銀時だった。

メリークリスマス！（前書き）

Merry Christmas

時期はED後

メリークリスマス！

今年もやってきた聖なる夜、クリスマス。

クリスマスイブの日に、サンタクロースがやって来て、子供達を喜ばせる。

でも、サンタクロースってお「子供の夢を壊す発言しないでください！」

メリークリスマス！

冒頭にツッコミを入れたのは、新八。

「おかしいと思いましたよ……銀さん、ちゃんと台本通りに読んでくださいよ」

「んだよ、新ハイ。俺ア、事実言っただけだ」

「でも、銀時。神楽ちゃんがなくて良かったね」

「神楽ちゃんは、サンタがいるって思っていますからね」

「あ、クリスマスプレゼントを持ってきたんだよ」

「マジでか!？」

「神楽ちゃんが帰ってきてからね」

その神楽は、厠だったりする。

「あ、神楽ちゃん。はい、クリスマスプレゼント」

「何アルカ!？」

「酢こんぶ1年分だよ。好きなんですよ、酢こんぶ」

「リオ、ありがとうアル!」

リオに飛び付く神楽。

「で、新八くんにはこれ」

「こ、これ…!」

「お通ちゃんのだよ」

「いいんですか!？」

「クリスマスプレゼントだもん」

「リオさん…!ありがとうございます!」

新八は感激のあまりか、声が少し泣き声だった。

「さて、プレゼント渡し終わったし、クリスマスケーキを食べようね」

「ちょっと待つてエ！俺は！？俺の分はねえの！？」

「え？銀時の分はないよ？」

「おかしくねエ！？」

騒ぐ銀時をリオは引つ張り、身を寄せた。

「食べ物だけど、ちゃんとあるからね」

そしてリオは、銀時にだけ聞こえるよう言った。

「それより銀さん。銀さんはいんですか、クリスマスプレゼント」

「そうアル。リオはちゃんと用意したのに、銀ちゃんはないアルカ？」

「銀時は、万年金欠だもんね」

「そうでした。給料さえ、まともに払ってくれませんか」

「そうアルナ。期待する方がバカル」

「てめーら…好き勝手言いやがって…」

「じゃあ、銀時。クリスマスケーキ作って」

「はあ！？リオ、買ってきたんだろ？」

「買ってきたけど、銀時にだよ？みんなが食べてもいいなら、別にいいけどね」

「良くねえよ！………わかったよ！銀さんからのクリスマスプレゼントは、それでいいよな！？」

銀時の問いに全員が頷いた。

「……メリークリスマス！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8069y/>

妖と夜叉 番外編

2011年12月25日18時52分発行